

オスカー・ワイルドと『女の世界』

角田 信 恵

1887年のオスカー・ワイルド

ワイルドは1887年4月ごろ、カッセル社に『淑女世界』の建て直しを依頼され、応諾しました。ワイルドの側には応諾すべき経済的理由があったのでした。彼は1884年に結婚し、続く2年のうちにふたりの息子が生まれています。けれども資産としては父から遺贈された小さな土地がアイルランドにあるだけでしたから、1886年の初頭には視学官のポストをねらって運動したり、1887年に開館予定の一種の文化施設、「民衆の館」の秘書官のポストに応募したりもしています。一家の長として、彼には家族を養うに足る安定した収入を確保する必要があったわけです。むろん、この時期、ワイルドは著作で生計を立てられる作家ではありませんでした。ですから、1885年から1886年にかけては『演劇評論』(Dramatic Review)に8篇の記事を寄稿したり、1885年から1887年にかけては『ペルメル・ガゼット』(Pall Mall Gazette)で書評欄を担当し、時には毎週のように書評記事を書いたりしています。ワイルドは1885年からの数年間、ジャーナリストとして生計を立てていたわけです。

ですから、カッセル社からのオファーは彼には渡りに舟といったところでした。こうして、ワイルドが女性誌の編集をしたのは、不本意ながら妻子を養うためであったとされて、批評家からは長らく看過されてきたわけです。むろんそれには唯美主義者としてのワイルド像と女性誌の編集者としてのワイルド像とが齟齬するといった事情もあったはずですが、すなわち、ユリの花を手にはピカディリーを歩くワイルドからは、チェルシーの自宅からフリート街にほど近いカッセル社まで、地下鉄で通勤したであろうワイルド(Ellmann 276)が想像しにくいというわけです。

商品としてのオスカー・ワイルド

たしかに、唯美主義者としてのワイルド像と女性誌の編集者としてのワイルド

像との間には齟齬があります。しかし、唯美主義者としてのワイルドと女性誌の編集者としてのワイルドにたいした違いはありません。

カッセル社が女性誌の建て直しをワイルドに依頼したのは、当時流通していたワイルド像を利用しようとしたことだったと思われます。1886年11月に発足した『淑女世界』の創刊号の表紙と、1887年11月にその題を改め、『女の世界』として発足した最初の号であり、ワイルドが編集した最初の号の表紙を比べれば、カッセル社の意図は明らかです。『淑女世界』では、“LADY'S WORLD”と誌名が印刷され、その左の下の方に“A Magazine of Fashion and Society”とあります。その編集者はおそらく同社の重役であったウィームズ・リードだろうと言われていますが、その名前はどこにも見当たりません。一方、『女の世界』では“A Magazine of Fashion and Society”という言葉は消えて、誌名の下に“Edited by Oscar Wilde”とはっきりとうたっています。1885、6年のワイルドは合理服を擁護して、女の衣服についてジャーナリズムで発言したりもしています。ギルバートとサリヴァンのオペレッタ、『ペイシェンス』(1881)では唯美主義者のバンソーンが女たちにもてていますが、それと同じく、女たちにもてはやされる唯美主義者としてのワイルド像をカッセル社は利用しようとしたのです。

とすれば、このときワイルドはかつてのアメリカ巡回講演のときと同じことをしていることになります。唯美主義者をからかうこのオペレッタのアメリカ興行を企画したドイリー・カートは、その成功のためには唯美主義者なるものをアメリカ人に知らしめる必要があると考えて、ワイルドに1年間のアメリカ巡回講演を打診しました。ワイルドのほうもカートの企画にのって、1881年からほぼ1年間、アメリカを講演して回りました。講演にあたっては、普通の服装のこともありましたが、ビロードのジャケットにふりふりのシャツ、それに半ズボンといった、いわゆる唯美主義的ないでたちをしたりもしましたし、少なくともアメリカで撮ったプロマイドはそうしたいでたちでした。むろんこれもお金のためでした。しかし、同時にそれが自らを商品化する行為であったことは明らかです。オペレッタの宣伝の具であったオスカー・ワイルドは、今度は女性誌の宣伝の具としてのオスカー・ワイルドになったわけです。彼は一貫して「オスカー・ワイルド」という商品によって、生計を立てようとしているのです。

それはきわめて逆説的な態度です。19世紀後半のイギリスにおいては、妻子を養うことができこそ、一人前の男だとするイデオロギーが強化されていました。しかしその同じ社会は商品化される存在を一人前の男とはみなしません。しかも、「オスカー・ワイルド」という商品は、アメリカ巡回講演のときには外見的にも、

そしてその後は婦人服について云々するようなその態度においても、当時の男性性の規範を逸脱しています。むしろ男性性の規範からの逸脱を売り物にしていたといってもいいでしょう。おまけに、アメリカでの聴衆も女性が多かったようですが、女性誌の編集者としての「オスカー・ワイルド」はまさに女たちの間での流通をねらう商品です。むろん、ここに彼が当時すでにホモセクシュアルであったという事情——ロバート・ロスの証言によれば、ワイルドがはじめて同性間の性行為をしたのは1886年だということです——を読みこんで、ジェンダーの点では男でない男でありながら、社会的にはやはり男であって、一家の長として妻子を養わねばならなかったという、ワイルドがかかえる矛盾をみてとっていいのかもしれない。

こうした逆説を解消するには、当時のジェンダー・イデオロギーを変えればいわけです。だから、ワイルドは女性誌の編集者としての立場を利用して、女たちのジェンダー規範の霍乱を試みます。それには『淑女世界』はうってつけでした。この雑誌にはワイルドが編集に携わる前にすでに女性の唯美主義者たちの機関紙といった側面があって、“Artistic Homes, and How to Make Them” だとか、“Artistic Occupations for Ladies” といった記事があったり、“A Student’s Experience at Girton College” といったような記事もあり、合理服をまじめに扱う記事もあったりします (Fortunato 44)。ワイルドはこうした方向性をさらに推し進めようとしたわけです。

『淑女世界』から『女の世界』へ

彼がカッセル社から『淑女世界』の建て直しを依頼されたとき、まずジェンダー・ポリティックスを問題にしたことは明らかです。彼はカッセル社の重役のリードに出した1887年4月の返事に「現状ではそれはあまりにも女々しく、十分に女らしいとは言えないと思います」(Letters 297)と述べています。さらにそのすぐあとにこう続けます。

われわれはもっと高い見地に立つと同時に、もっと広い領域を視野におさめ、女が身につけるもののみならず、女がどう考え、どう感じているかも扱うべきでしょう。『淑女世界』は文学や芸術や現代生活のあらゆる問題について、女が意見を発表する機関として定着させるべきでしょう。

「女々しい」雑誌から「女らしい」雑誌へという彼の言葉は、この雑誌につい

て論じるときに必ず引き合いにされる部分ですが、その意味は女が「身につけるもの」をもっぱらとしていた雑誌から「女がどう考え、どう感じているかを扱う」雑誌へという彼の説明と重なります。フェミニンの対になる語はマスキュリンであり、ウーマンリーの対になる語はマンリーです。マスキュリニティとフェミニニティが当時のジェンダー・イデオロギーのもとにある男性性、女性性を指す言葉であるのに対して、マンリネスとウーマンリネスはそうしたイデオロギーから自由な、生物学的な男性性・女性性といったものを指すといえます。

こうした態度を具現化したものが誌名の変更です。ワイルドは同じくリードにあてた同年9月5日の手紙で、『淑女世界』という誌名を『女の世界』と変更するよう、強く要求しています。

現在の誌名はいささか通俗的で、それでは新たな出発の成功もあやぶまれますし、内容とも不釣り合いです。それは現行のかたちの御誌にはまさにふさわしい誌名ですが、知性と教養と地位のある女性の機関紙たることを目指す雑誌には場違いでしょう。(Letters 317)

『淑女世界』という誌名は中産階級の女性たちの上昇志向をくすぐるという意味でも通俗的だったでしょう。けれども淑女という語が時代のジェンダー・イデオロギーに迎合しているという意味でも、それは通俗的でした。当時の女という語は女たちの連帯や婦人参政権運動や女子高等教育を連想させたという指摘もあります (Brake 128)。実際、婦人参政権運動はあくまで woman suffrage であって、決して lady suffrage ではなかったのです。

ともあれ、こうして新しく発足した『女の世界』は、これまでより版型も大きく、36ページだったのが48ページとなり、表紙には「ウィリアム・モリス風の」(Brake 138)、もしくはアール・ヌーヴォー風の植物の文様が描かれます。しかし、ジェンダー・イデオロギーの解体がそう簡単にできるはずはありません。ブレイクが指摘していることですが、この表紙では寄稿者の名前がミス・サッカレーとかザ・カウンテス・オブ・ポーツマスといった既婚か未婚かがわかり、結婚後の夫の階級による表記だったり、もしくはヴァイオレット・フェインといったペンネームが用いられています (Brake 138-9)。これが記事の後ではたいていアニー・サッカレーとか、コンスタンス・ワイルドとか、本人のファーストネームにファミリーネームという表記になっていて、プロの男の作家の場合の表記法と同じになっています。表紙にみられる寄稿者の名前の表記法が家父長制のジェン

ダー・イデオロギーにのっとったものであることは言うまでもありません。

ジェンダーの解体？

しかし、とにかく、最初のうちはワイルドの意図はその雑誌に明らかで、ワイルドが編集した最初の号では、それまで女性のファッションの記事が置かれていた巻頭に“Woodland Gods”というシェイクスピアの『お気に召すまま』の野外公演についての記事が置かれて、美しいオーランドーの挿絵が大きく載っています。これはその記事の著者で、ワイルド自身の数年来の友人であったレイディ・アーチボルド・キャンベルが演じたオーランドーの姿ですが、この絵をみる限り、女性が男装しているようにも見える、ジェンダーのあいまいな姿です。ローレル・ブレイクはそれを男性とみて、ここに男性の姿の商品化をみていますし、フォーチュネイトはこの姿に女性の男装をみています。いずれにせよ、それを享受するのは教養ある女だけでなく、ゲイの男たちもだ、ワイルドはゲイの仲間たちを读者として想定していたのだというブレイクの指摘は、妥当でしょう (Brake 132-133)。女役をやる少年俳優がやったであろう男役をあえて女がやる、そこに見られる錯綜したジェンダー布置にこの記事の著者自身は無意識であったにしても、ワイルドはおそらく、そのとき彼女が演じたのが少年俳優そのものであったことに意識的であったらうと思われるからです。ワイルドはリードにあてた手紙のなかで、この雑誌を「男も楽しく読めて、寄稿を名誉なことと考えるような雑誌にすべきです。……芸術家には性別がありますが、芸術にはありません」(Letters 297)と述べているのですから。

ほかにもワイルドは彼自身の記事で、合理服を称揚したりもしています。そして「20世紀のドレスは性別を表すよりは、職業を表すものとなるでしょう」(“Literary and Other Notes” 40)と述べたりもしています。しかし、この雑誌は当時のフェミニストたちの雑誌とは一線を画しており、女性の参政権を主張する記事があるかと思えば、それを否定する記事もあるといった具合です。寄稿者名の表示に見られるのと同じゆらぎが、雑誌の全体に見られるのです。

また、売れ行きも今ひとつだったようです。ワイルドが編集する最初の号が出たからほぼ一年後、彼は経営者側のレポートをうけて、現状では値段が高すぎるとして、6シリングか7シリングに下げよう提案すると同時に、「女が関心をもっていることで男では本当には書けないことがたくさんある」と述べ、もっとフェミニンな事柄を強く打ち出すべきだとも述べています (Letters 353)。最初にこの雑誌を編集するよう依頼されたときの、あまりにもフェミニンすぎるからもっ

とウーマンリーにすべきだという言葉から1年半後の言葉です。

こうして、1888年11月号からはファッションの記事が各号の前半に置かれ、「エディターズ・ノート」は雑誌の最後に押しやられるようになります。むろん、これは商業誌であり、ワイルドの思い通りのものができるはずはありません。1887年10月にはヘレナ・シッカートに宛てた手紙のなかで自由裁量が思ったほどは許されないと嘆いています (Letters 325)。それに加えて、ワイルドが編集に熱意を失っていった背景には、ワイルド自身のジェンダー・イデオロギーの再確認があったはずで、ワイルドにとって、女性誌の編集者になることは、最初から矛盾をかかえた行為でした。彼は家長としてあるために、自らを女性化しました。しかし、編集者としてのワイルドが女の寄稿者たちに采配をふるっていることは、書簡集のなかのさまざまな手紙に明らかです。ワイルドは編集者としてのこの時期に、ジェンダー・イデオロギーがいかに強固なものかを思い知ると同時に、いくら男性性から逸脱しようとも、やはり自分は男性なのだと思い知ったのだと思われます。

だからといって、ワイルドは自らを商品化することをやめたわけではありません。その後のワイルドは作家として、すなわち男として、ゲイとしてのオスカー・ワイルドという商品を男たちの間で流通させようとしていきます。むろんそれも逆説的な行為であり、しかも危険な道であったことは言うまでもありません。

注 このレジメは、本シンポジウムをもとにした「オスカー・ワイルドと『女の世界』と女の世界」(*The Woman's World*: November 1887-October 1889, 2 vols. 『別冊解説』、2008年)と一部重複する。

引用文献

- Brake, Laurel. *Subjugated Knowledges: Journalism, Gender & Literature in the Nineteenth Century*. New York: New York U.P., 1994.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Hamish Hamilton, 1987.
- Fortunato, Paul L. *Modernist Aesthetics and Consumer Culture in the Writings of Oscar Wilde*. New York & London: Routledge, 2007.
- Wilde, Oscar. “Literary and Other Notes.” *The Woman's World*. Nov. 1887.
- Wilde, Oscar. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland & Rupert Hart-Davis. New York: Henry Holt, 2000.